岐阜県教育ビジョン検討委員会

高校の在り方専門委員会（第2回） 議事要旨

日　時	平成２５年６月１３日（木）　１０：００～１２：００
場　所	教育委員会室
出席者	＜委員＞　８名（５０音順） 加藤直樹委員（委員長）、髙賀敦子委員、嶋﨑吉弘委員（副委員長）、 島田亜由美委員、髙田大嗣委員、中島潤委員、信田哲彦委員、前谷智香委員 ＜県教育委員会＞ 教育長、教育次長、義務教育総括監、総合教育センター長など

会議の概要
１　開会 ２　あいさつ ３　協議事項 リーダー性やグローバルな能力の育成ついて ○　世界や日本、地域社会でリーダーシップを発揮できる能力の育成 ○　グローバル社会で国際的に活躍できる能力の育成 ４　閉会

◆　意見の要旨

※　事務局から資料１の説明

【加藤委員長】

○　前回の意見交換を踏まえ、テーマごとの枠組みを事務局でまとめていただいた。今日のテーマである「リーダー性やグローバルな能力」とは一体何か、どう育てていくのか、その仕組みはどうあるべきか、そのような力をどのように育成できるかなどご意見をいただきたい。

【信田委員】

○　リーダーとはゴールを設定してそこに向かってリードしていく人というイメージ。会社経営の視点で考えると必要になってくるのは「お金」の視点。数字に強いことが必要。お金についての数字の仕組みを学生はほとんど学習していない。バランスシートなど数字をしっかり読めないとリーダー性は発揮できない。

【嶋﨑副委員長】

○　社会生活で数字に当たる場面は多くなっていく。義務教育段階で簿記会計の授業が必要。計算は必要不可欠な能力である。

【信田委員】

○　決算書が読めればよい。数字がしっかり読めて状況判断ができれば、世の中を見る目が変わる。個人的な生活にも決算書はある。

【髙田委員】

○　リーダーには現状にある課題（社会の課題、所属する環境の課題）を分析する力が必要。その課題を踏まえてどんなゴールを目指していくかを考える力が必要。

【中島委員】

○　リーダー性とは「正しい判断力を身に付けていること」と「自分の考えを相手に伝える表現力があること」を備えていること。

【島田委員】

○　数字は立場に関係なく、状況を客観的に判断できる材料。リーダーとして総合的に判断するときに、個人の主張だけではなく、冷静にデータを分析することが必要。

【前谷委員】

○　リーダーとは「見極める力」がある人。集団の中で人の長所をみつけ、その力が発揮できる環境で活用するなど組織をつくっていける人。

【髙賀委員】

○　日本の教育はお金についてあまり触れない風潮があったが、消費経済について学ぶことはやはり重要。

○　リーダーとは数字やデータなどのエビデンス（根拠）をもって価値観の違う人にも説明ができる人。

【加藤委員長】

○　リーダーについてのいくつかの視点は出てきた。次にグローバルとは何かを考えたい。

【前谷委員】

○　日本人は往々にしてみんなと同じことをすると安心できるという傾向がみられる。その中で、グローバルな人材とは文化や考え方の違いに振り回されない視点で目的に向かって柔軟に取り組める人。

【嶋﨑副委員長】

○　グローバルな人材とは、英語の能力だけでなく、多様性を認める気質を備えた人材。多くの経験をすることでコミュニケーション能力と多文化と共生できる能力を持つようになる。フレキシブルな視点の持ち方が重要。

【加藤委員長】

○　グローバル能力と英語力とは直結しない。英語力はグローバル能力の基礎的な力。

【髙田委員】

○　多様な価値観に対する耐性を持つことが必要。同じ事象でも視点によって多様な価値観がある。それを知ってどう判断するかが重要。

【加藤委員長】

○　多様な価値観から自分の価値観をどう導きだしていくかが重要。

【島田委員】

○　日本独自の文化やアイデンティティを知って自信を持つことで正しく世界を見ることができる。グローバルな人になるためには、もっと日本のことを正しく知り、海外で伝えられる力が必要である。

○　中小企業では、技術力があるのに英語力がないので海外に出ることを躊躇することがある。正しく伝えるためには英語力は必要。

【中島委員】

○　皆さんが言われるように、グローバルな人材には「柔軟性」と「アイデンティティ」が重要。柔軟性とは、他者を受け入れる力のこと。高校での異文化体験はそれにあたる。アイデンティティは自分や自分の国のことをしっかりと理解し、他者に伝える力を持つこと。それには手段として英語力が必要。

※　事務局から資料２・３・４及び参考資料２・３の説明

【信田委員】

○　組織の中で誰がどう考えているのかを掴んだり、外国人との文化の違いを認識して相手の考え方や心情を掴んだりした上で、どう導いていくのかを考えることが重要。
そのためには事実を知ることが重要なのだが難しい。

○　事実を知ろうとすると時間はかかるが、調べれば必ず出てくる。知ることにより、今まで自分に見えていなかったところが見えてくるようになる。

【加藤委員長】

○　自分で知ろうとすることは、教え込む学習とは対極にある。自ら理解しようとする経験を持たないと真実は読み解けない。

【信田委員】

○　経済学的な問題点も、実は既にその多くは解決されており、解決ツールも存在するのだが、その存在を知らないと使えない。

【加藤委員長】

○　そのような新しい「知」をどのように探すかは知ろうとする姿勢がないとできない。知識基盤社会は、「知識」を知り、それをどう活用するかという社会なので、その知識にどうアプローチしていくかが重要。

【嶋﨑副委員長】

○　「個の主張」と「全体の調和」のバランスが重要。日本人はやはり「個の主張」が弱い。日本人らしい「個の主張」の仕方を教育の中で進めてほしい。主張できることがグローバルスタンダード。

【加藤委員長】

○　グローバル・コミュニケーション能力育成支援事業やＳＳＨなどの取り組みの意味はどのようなものか。ＳＳＨ指定校などは、単に知識・理解だけの問題ではなく、議論し伝えていく能力、多様な物の見方などを提起しながら進めている。学校はそれらをしっかりと見極めながら全体のカリキュラムを変えていくが、学校単位で変わる可能性があるのか、また、そのような方向性を示すことができるのか資料を見ながらそのことについてご意見をいただきたい。

※　事務局から資料５～７の説明

【加藤委員長】

○　岐阜県の例が出てきませんでしたので、先ほどの高校改革リーディングプロジェクトの選択校として名前がでてきました、岐山高校の「探究型教育システム開発構想」の事例について中島委員よりご説明願います。

【中島委員】

※　「探究型教育システム開発構想」の説明（別添資料）

【島田委員】

○　このような高校の取組は中学生に伝わっているのか。意欲のある子たちは率先して調べているだろうが、そうでない子たちにも知ってもらうことが必要。

○　中学生は自分の学力や偏差値で高校を選んでいる。このような取組をしている高校のことを知ることが、自分の将来の可能性が見えてくるきっかけづくりになれば。

○　中学生に高校でいろいろ体験させるのはいいことである。この高校に行ったらこんなことができるとか、こうなれるんだというように可能性や夢が広がる。

【髙田委員】

○　先日、県の中学校長会で、最近の高等学校の取組や情報を聞き、たいへん参考になった。今後も、高校の新しい取組や情報を発信していただき、新しい情報も含めて生徒たちに情報提供していきたい。

○　高校が変わるためには、教員や日々の授業が変わる必要がある。オールイングリッシュの授業でも、取り扱う題材が小中学校と同じ日常会話ではなく、社会経済、国際情勢などグローバルな視点での教材選択をして欲しい。日々の授業の中でどのような視点を持ってやっていくかが大事である。

【加藤委員長】

○　高校は変わろうとしているが、外から見ている人に認知されるまでには時間がかかる。

○　教育委員さんとの懇談会で、高校の変革の要になるのは教員の資質の問題であるという話になった。

○　高校が変わるのには時間がかかる。来年できているというものではなく、５年１０年というスパンの中で考えていくから、そこにこのビジョンを作っていく意味がある。

【信田委員】

○　息子は今年高校に入学したが、中学校からはこのような高校の変化の情報はなく、先生の進路指導は高校に落ちないようにという安全策であったように思う。

○　大学と今の高校教育がどのようにリンクしているのか。これをやって大学入試にメリットがあるのかという点が次の課題になってくる。

【加藤委員長】

○　高校・大学ともに特色を持った改革しようとしている。世の中にどのようして認めてもらうか。高校・大学ともに説明をする努力をしなければいけない。

【髙賀委員】

○　大学や企業など外部機関と連携した取り組みを通して、応援していただいたり、評価していただく、そういう機会が必要である。高校は、評価に耐えうる生徒を育てていかなければならない。

【前谷委員】

○　子どもたちには、立場を変えた実践を体験していただきたい。子どもたちは、地域の人と交わることにより、実社会のことをいろいろ学ぶ。指導していただくばかりではなく、子どもたちが、若い感性で、地域に提案（発信）するなど投げかけてほしい。

○　企業に仕事体験でお世話になるという目線ではなく、企業のいいところを見つけるなど自分が主体となって社会の中で体験していくことが子どもたちにとって有益である。

○　生徒の立場を、「周りから受ける側」から「周りに投げかける側」に変えることが、自分の枠から飛び出すチャンスになり、それは自信につながる。無難を求める子どもが多い中で、チャレンジすることで見えてくるものがあるはず。

【嶋崎副委員長】

○　高校教育改革はスピード感を持ってやってほしい。日本は２０年遅れている。

○　これまでのインプット型の教育から自らが発信していくアウトプット型の教育に早く変えてほしい。

【信田委員】

○　今は戦略が固まったという状態。戦略が始まっているということを関係者に浸透させることが次の段階。みんなで作っていこうという気運が盛り上がれば自然に進んでいくのでは。

【中島委員】

○　高校は５年後１０年後の社会がどうなっているのかを考えている。その中で子供たちをどう育てていくかを常に考えている。スピード感を持ってやらなければいけないが、ちょっと時間のかかることもある。

○　教育ビジョンに書かれたことが５年後１０年後の岐阜県の教育の方向を決めるので、進む方向を間違えないように我々委員が意見を述べていきたい。

○　子どもたちは本来、力を持っている。持っている力は無限大。その力を開花させるしくみをつくることが大切な改革であることをビジョンの中で表現してほしい。

【髙田委員】

○　高校では、今までの普通科・理数科といった学科だけでなく、社会の動きにも対応できる新しい学科を考えていってはどうか。それをどのように発信していくと、生徒や保護者に理解が深まるのかも検討していく必要がある。

○　学習指導要領の枠組みの中でやらなければいけないが、専門高校もそれぞれの特色を示すことで、科の持ち方やコースの持ち方について発信力が増していくのではないか。

【中島委員】

○　現実には、やりたいことがあっても高校には学習指導要領で様々な制約があったり、教員の定数の関係で小さなクラスが作れなかったり、様々な壁がある。その中でできることしかやらないのでは、新しい「知」を創造できないので、そういう枠にとらわれないで議論することも必要なのではないか。

【髙賀委員】

○　介護福祉士や調理師の資格取得にはいろいろな縛りがあり、技能や資格取得などの対応や専門的な能力を伸ばすには、既存の枠組みの中では難しいことが多い。６年間の中高一貫教育校なら、多様な取り組みが可能となり、生徒のいろいろな能力を伸ばすことができるのではないか。

【加藤委員長】

○　リーディングプロジェクトの中でも関高校が併設型中高一貫校を検討している。これについて何かご意見ありませんか。

【中島委員】

○　進学目的ではなく、グローバルな能力や、アイデンティティを持った子どもを中高一貫教育で育てるという考えは良いと思う。

【前谷委員】

○　その学校ならではの取組を考えてほしい。その際、もっと地域の方を活用してほしい。

○　どの学校の校長先生もしっかりしたビジョンをお持ちである。しかし、現場の先生方は仕事が増えてしまうなどの意識があるように思う。その意識を変えることも必要だが、もっといろいろな考えを持った地域の人たちと子どもたちを引き合わせることも考えていただけるとよいのでは。

○　子どもたちの得意は、先生の視点と地域の視点は違うことも多い。だから、いろいろな職業人たちと子どもたちが出会う機会を作ると、子どもたちは、それぞれの見方があることを感じ、変われるチャンスとなる。

【加藤委員長】

○　他にもリーディングプロジェクトの選択校の中には、デュアルシステムなど地域社会との係わりを意識した取組が多い。

○　変革が必要なことがあれば国に提言していってもいいのではないか。

○　高校はすでに変わり始めている。委員の皆さん方のご意見から、改革の方向性は良い、それをもっと早く進めませんかという応援のメッセージをいただいたと受け止めました。

○　次回は、実際に生徒の姿を見ながら、具体的なところにもう一歩入って議論していきたいと思う。